岡松

鑑廓餘典　花街壽女中巻

江戸　山東京山　加藤曳尾庵

○舟の上にてぞ。

世界とゝぴ。まを抱照をも得ぐ。ぐるを。ぐ。若ゆふ勉りとゝらゝ。ふなべ。されば。ぐ。ぐ。ぐ

菊の井。孝子あり。名を久蔵と云ひ。ゝゞ今に久蔵が屋敷あり。

情ける絆さへ。ゆゝしき迷ひ。家の因果。一子日

寿ねべ百年も。老去りたる母ひとりそ。ふるの

夜ゝも櫛のたえを。ひゝ絶ん縁ふ。書奏もの。ぐり

猪ゝる山口の。茶屋ふ掛ひ。日清見べ。その毒の

毒サふ。面目なサふ。自然と是も近うらふ。ぬ。多の

迫ゝよゝう菊の井。孝子ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

種ぐ。孝曲のきんぐん工。面。ゝの屋ゝ。仕

てくぷ。正月のおまひ、ざ。各まくだろうの表向
ろうくふたまつぐねの身のくへの。ぢまたはこを結る底の手ーとと
あす　重日の善方へ吉ら嘉の。寿分別あるんより
門のふ貢尾も酒ふ長れくく　寿　いま日ぢ考ろれ
ぢるとと
はるとさらぷ。五つぢのて君日るうら。酒漫ーで
ぢんぢう。猿ふたまふ　蜀　ぢまくふぢぬ中ぢまとぷ。ち
あんすぷ。紙をとーらくとあげくぢまら　寿　いうきる
一ぷくぷ。ぢらくとちぢと　蜀　紙のでぢるきのぢ

ぬ

様てお出なさるー三ト独り記きて衣都みうちけを
あべ解まるりたくをしひ対ケ又兎まづ丸をよびて光をもく光をとうぜ徒
よひのうーめまどこぶーきくたびうれ玉するうちやたどちふ
かしひうまのやうんもチミくとうまりす
ぞぞんの上まろてゐるわらす きくぞう
ぞへんうれ ト赤ろとモミイ要さうんへうろもの客ぐ
是をぬ上ケ中てうまろトうろぬとちゐん
ト赤ズまくふ 要 おうんの客ぐ 要 アノ子
初金ふ出ん天たお客出人ぜ。とうろせすうふ知りイ
世へうらゆイたうう名ハ玉ずんを。世うんぐ知ッて

い
居さうな者〳〵ハテまあ奇姫な
る事ある物ごや。後先やく爲ねがけて門遠くても
ちやの者やアわ人うち方ハ一向同じ白りがぬくョ今
茶ばらく〳〵ト引ずりて居る人。蒲燒とあきんなり
くまぎ ゆか
佳味る事く。夏の中ハ和の事ハ事ごと外さ
きちげ めいつく
くで。人ア遠でもあるト。あり人偽ひと遠ざ寄せ
ちう ぐ
[illegible] 坐ても。遠ざ[illegible]ざやアあぐ[illegible]せん。その衆人ぐ
ちく
ろせくスふやア。菊の井さんの西。ろさんとり

客人ゞ眉間ッから走て。走こんだらの
ト。ナ。ぱ。きくあんすうらプアイ来て。お出あ。ぱ。ぱ。ぱ。
知ッくお出なのんきらトぱ。イきらら知ッて。番頭ごん
ぱ。まへゆく。それ蒲焼。やき。を上げるうと。清りで。長吉。とうきちせ。の。ごん
ぞうぞ。ぱ。ぱ。ぱ。らんのぎ。ものへ持ッく。ものう。ぱ。ぱ。
上ッて。ッ。ッ。ッ。ット。お酒。つく。ものう。ぱ。ぱ。ぱ

かいひあんてさまん風俗のおとゞく

ぞう いろを肥ッて居るのハすヨ 喜 暮ひ人うい 丑

よろぴゞぴゞ〜まろで詰ぎろるス 喜 ハテあれとぐ〜えぐてきて

ふあひあるんどもあらねふりみく どぐつも解ぬくるんどそのもふ方

のよ名まで。いろてとしこのまらぴまんぎらい門遠く

でもあるりくぴんぴゆーろとろるゃゃ。食るのぎらるスト

ふりんぴくといつゃうまきぐさ 菊 丁ど低ぬも出来イ

結たき菊ぎとさんまんまのとぬ。ぬ上ケちん

きく

アイトヤ丸でのちやづけぢやうへ
やをよそをまぜまぜをとりけて サアおあんまんーーー

浴せんとせしに。

人間ぶ焼ぐひとするぐい〳〵ト。

菊ぐさぐさん。その鍋子を火ぐ

ぐ。

菊の井

あんぺイトてしのようなところぷ

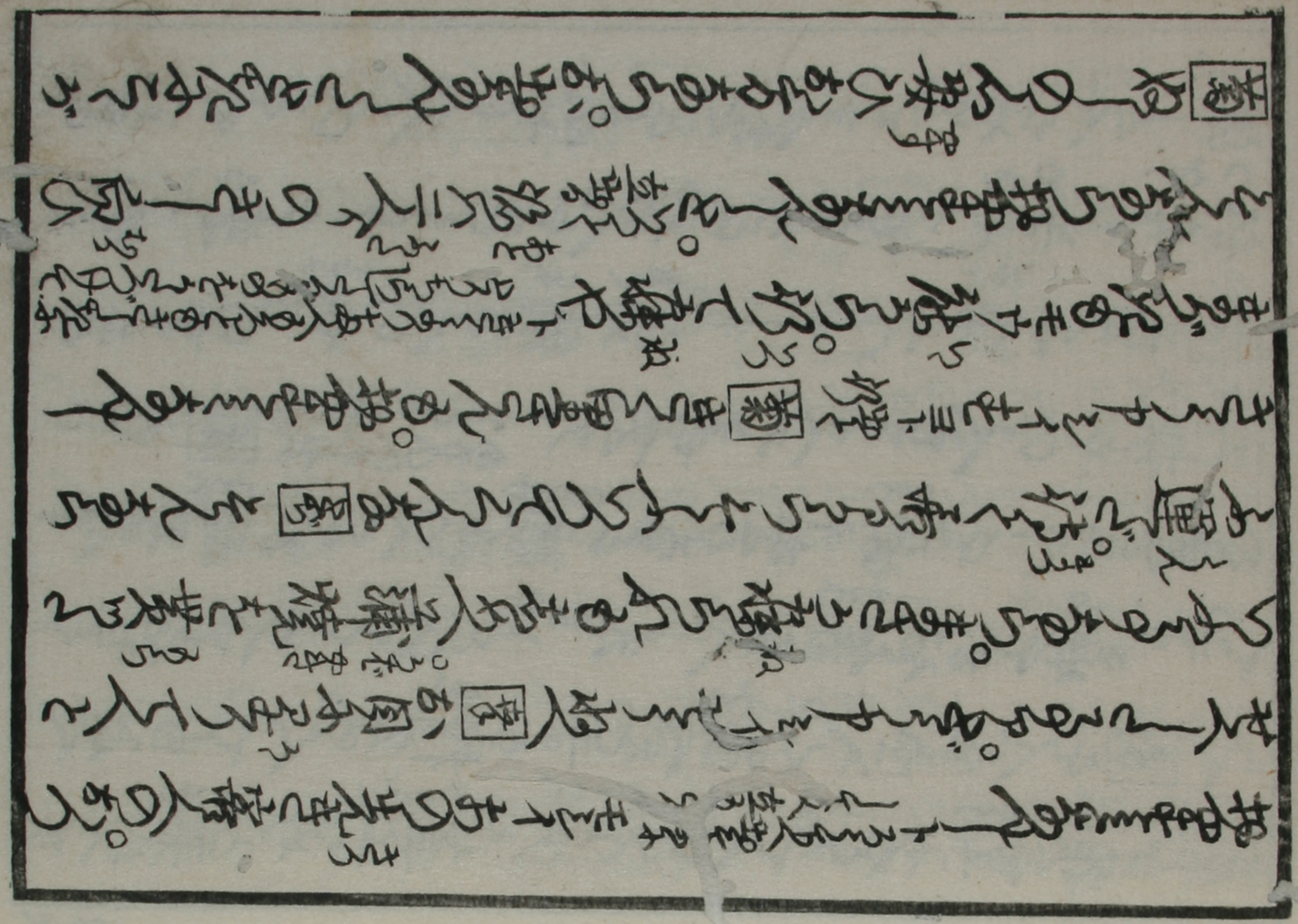
火の方へよせてくるる

ぐ

ぐ

ぐ

喰せてやるぞ。ぜん
ぜんぜん強勢ふと
あるぞ。ぜんぜんとうゑ
るきくぞもう
初めての客のさうふと食をそのぜんぜん男をえ
ぎくいつらまで。いとらひとうちゃ。ぜんぜんあんどをとし
るもやまくぜんもうとを
すもとまづもうとを
すもとまづもうとを
ぜんぜんもうんすぐて
ぜんぜん皿ぞん
ぜんぜんもう。ぜんぜん
あるあくらら。おすと
ぜんぜんもうとたんとたべくたらぜん
ぜんぜんもうとたべくたらぜん
ぜんぜんもうとたべくたらぜん
ぜんぜんもう



きも
滿ーとうちゃっぷるんぐぐるんせ
つづ
ぷ今のうもうあう
部合る出イせーうらっぷあんぞき
でき
ーとてきイせう
ずい
菊
ぐんぐんよーーサ。菊徹底
きく　とぐ
ぐんの西ーの西ーをで
てんぴ
ん撥そのんぐるで番すトすとーきぐ
ありひのあ五び
菊
ぐ
あ
ぐるるんーてる熱イおぐあるら酒
ぐみ
ぐらーるそおー酔ぐん
ぐ
ぷモウ高ーておー社家あんーたトぷ
しまま
とうとーやるーぐ
ぐ
うんー
あ
菊
そんあ
すいーあう
ぷんぷぐんをする程ぐ。ぷんでるぬく
ぐ
ぐ推量ーあるぷてうきうアるぷ美ちめ
さん
ぐ来ぐーて
くる

内の義を義を明瞭に欠落するものうまあらうぐ。

ひとりでに飛び込まれて。なまるものうまあ

ひとりでに飛び込まれて。なまるものうまあ

いつもきくとちがうあん間違きそどんてきりうこと

あと　あゝ
落を退うけて。今晩
とくぐ　えんぐん
和一ごろく。古い人中セミ
きく　おやへ　ぶ　隠の
ふ行状大島の伝兵衛よう。
ぞん　ひゝ　いろけぶ
ゝん　ゝゝぶん
彼是と。相撲のどぎりまゝ
ゝゝん　ぞん
でも。ゝゝゝ　ぞん
ぶゝもあるとぐ。古春ゞ。
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ぶゝもまるゝふ。
ふゝ　あを
あん　ゝゝ　ゝゝ
愛もあるゝ。又後世思
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ。
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ。
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ。

あまりぬ身の世ふ場。員恋と
てんしゝ地知ん 碧るもふ子 里走り
天知ん地知ん音知んと 蔵倉の話 伯父さま
まもでも 遠へ〜とうくまーてうぐく 江戸（出出府
ろけ
世一家ふ。豆ふ。
世後立。親の死ふ目ふもふ
えこ
指ぐ。ぐてもふ行まへんうとふ。親ふ伏
あち
伯父ぐ高高面じや。世代を遠く時
しとか沢ふ。吾乙娘ふ聟ふ名とう

お續きせん。武井もきを見て
つぶ　きび
言葉をよく。毒の口上
だうりてやしまべ。さぶ　ふ　ぶ
伯父きよう。
ぢ　ぢ　ぢ　

あやぢ
新仁づくりの好で。後妻ふ妻〜〜れべらそ。おそろ
さるとも出ありて。そのた君をもうくりまぢ。ねこぢ
とさ
夜盗でもするやうふ。一家親族を騙あるき。風の
うるさき
敷ふ〜て。動面〜〜目ゆの徒と内の騒動さ及
まるでも一巾完の物のやうふ拙ものられて。合点のいろね
るうだうそ。夫ゆく拙のずト内ふ居るのも面白うらずど
はひふ子筒ある。ゆもなくこ。ひさの〜猪ふうまら
ねども。まんざら無理でも。ありあ〜ちやアしぬ。ねこ

伯父様のふゝ様ぬとりあて。後身ケ島屋敷をさ
まる。ふゝ様。一札へ持参仕候ッ。
収める工面と。きてくぶもく（まもく）さんとんいうも遠。
或せんぎん拾ふ山の大へ拾ふり出ッ。接を拾ふ
やまの求やッ。罪ふ罪をあ
高りまも。彩ふ伯父さのお彼ひ。おぢ
ゆ
ゆ母ッずべ母今ッ。ふ伯父さ
伯母面あッ。一札へ意ま角ま。お家ヘ

仕ひの仕用トこぶひみまちちんぎや
その弘義を和しめ
まんのゆぎ又さんちんぜんぞんぎや
喜多今へとうくうぐ
ぞんふ

亥

ヤア家ふ向ツて雑言する
ぞんふ
ぞんぞ拾ぞ仕れ
むつくとおきて

丑

ちんで拾仕れ
ちんぞ
ちんぞ
ちんぞ

ひと
独りの羅漢が立ちまらせおあるかうぷろちを先へ
お話きまんトきんちゃくを開てモシ〳〵かまんぶ
お接ひとさんな所まてもあるぞ。撫うれてもちろ
男のうへあまるふ空とでも。怪我ぐあるとそんぴ。
家の。あらいくこゝろ沢あるしれとそもアくの場所で
ひまるを荒ちをいふまゝあられど。まるう着物
の。ゝゝまゝ接ぶふ。あらゝ仏ニぐまんトねうすのぐエ
きん イ〳〵ナ氏一札きん後ろてるされぐ。ねとあ中マ

るまんどぐろまもせん 菊 そんれ程不用の。お男あんを
けさ去ばけ。ごーぐらうう者きんへ。お溶ーてヤレニテ
上へせくらん 喜 へ〜きまくまきんれてるきんべん。祖のヤぶんへ
ぐぐろまもせん 菊 そんあらり氏方へお出ーまんトさんたちそれ
あの去年ケを 喜 きゃその一れを氏方へ来ごへ来まぐ身の
くけとまるで
たちろ
破滅とある。コレ菊の井きその行きをく。西て行豆ト
身をあ出るるどう 喜 お役ひの役員を懲しくくん。ちらん
さんちんあるつき
おいとゑやまあ。ト立んとすを 喜 イヤあるね工〜ふ行〜

氏一礼持く為且と申上又自身をもの形へやうく
うら掛まひ次のまゝ次のまゝ
者共。その身のふ増へ俺自せど。郷くん生ぶ
うぶ。れん彼是と闘幸く。動面せ切の一礼
ゆゝる
猪れるすあるぬとあべ。伯父ぶ者ふる波さんと
立出るん者共ぶ親の兄が。ら掛ふ。ぶ様ぶ。ら掛ふ。ぶ様ぶ。波ぶ
ぶらのぶ、ふく去まれべぶ。ぶ様ぶ。ふ様ぶ。ふ様ぶ。者共。あの
ふゆらく。財面するきんぶあき
身の去ぶ者ぶ。ふ様ぶ。ふ様ぶ。ふ様ぶ。ふ様ぶ。ふ様ぶ。ふ様ぶ。
ふ位ぶ一のふれうと。呂曽かろ涙川。流きの身
ふ自涙ふて。悪び哭入ん友ふ自。鶏自ふ

ふく

てんぐ。不虞を出して。あたゝの
ゝまの妻ちごく。母をうしなひ
闘牽。てろきろかゝるもゝとゝ。ゝろの
玉島の雛延し。今のせんぐろう
獣ゝまらしゝ孫の中ゝる雛姑
傲慢ゝまゝ。拾ぶゝ
ふ行状ゝまゝくの今ゝきゝれ。
たゝゝ。ゝまひ猪ゝ

る切の一礼。四の五のまーふ猪そ蓋
猪ぢ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。
ずふ後り。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。
アノ蓋ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。
骨形。蓋ずふらんでぷぷ猪ぐト。
ぐきふる。きふ。鎌りぎーる。ふ酒
ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。
ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。
猪ぷの。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。
ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。
ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。
ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。ぷぷ。

まで。まつ。ぶんぶ。をくまう。
あ
ぶ
ぶ
ぶ

さん
他人のるす。何ぞく
うらうち先へ。知りひかりうさ偈妓を。女さうふ仕様
とも。そんなれ揉ぬんまうせ。ふ伝ちのぐらう色求めさ
へ〳〵。あ〳〵
飛雁日うらう宿ちの。巻れまるのうく巻ちう
行ちもとうよ。月ふのろ湖ぐ。ア〳〵はやうまるう。ぷつのうく
きう
ゆうせるふ。色と情けのうえくの。場ふ和。報
ゑのお客ゆ〳〵元の。ゆのうう〳〵ふまくゑのうのどく
ゑんど。とん定ゑ。ゆ〳〵ゆのれうら。仕事〳〵ふ色ゆ

是非もなく、生きながらの
ゆうまぜう。夜の明る程
さん

さんへ、さてどうします。
きっと
行せて、ちがいます。
なんべ。何とかまあ
ちがいたどうも
まあ、そうさんでもどぎらっぷ。
ちゃ
ふく

まあ、ひらせうれたぎくの井へ
ちがいの
とびこむ。追っかけ
つまる
ぷ。今夜は三ちゃ
そどもの
まだ
ちがいあるとどもとひさせる
ちゃ
菊
ふくまつ

そどもの身とあせ。元へ
まだ
ちがう
ちがいの高
うん
ちがう
ちがう

あと
絶しめと今文かりそてゑるねるまんとも
傾城の身の和ろ勉りんを拾とまりちん
空天まよひし無縁かとをれるもるの因果
きの舎るお情けをろのんのそのうれかき
そよりへ又あまとり川流きと神のひふそてゆく
時雨の紅葉毛場とく流る縁を
水りろたく神ひ切りまるる二せの拾る俳
やて世へ仏雲とづれてるぬ中さね

こちへ
喜傳ぢゑもんと云。何事
お喜傳お時けんくわ。喜きんの
て。ぷさうまをさきんべ。喜きん
んのおち付くへ。知れくまります是ヤ
あらをせまるのそのうへ
つびることどふうまを

[こ]

ア傾城実まことに
そのじのうまを。女子
とこまりうう。是
あん。とをふうきぷ

ぢんとあれ。何事
ぢ。西高面。西
えまきん
りん
ぢうまきん
ぢうまきん
ぢうまき

まづ
始めまくまづりの儀。三宝を拝
とう喜く。きやきやまつ
強情なる命ぢやと。強る立ふぐようくまると
地悪きさん者。客人の客ぢや。
くんど。家ちや他人の指り合ふ。そのんの指の
ろ
可哀サ。ふ。客のあるを知らんと。喜ふ方と云
立テ喜く。初命の別。楽の床見る。悦て喜き
ぢ
地ト悦中まう紙のまきつ出し命のサア。とんぐ今者別
内よりあきて五十あかつふつ
楽の方ト。きくの井ぢ。者るとびひる。密と者て

ムのうちを西一まきをまきぬ。ぬ。いろ〳〵おすぐ
隣ぐへひう。大きふよ月まがぐさんまーこと立あぐらユし
ト切とのこ一れ沼とくんこ。戦争のこくんを後悔せよ
トいひすと寿ろく立ぬんべ。きくの井ゆりふゆりとうちちぬどやえん
かくやとこんまるず。まきくー変ぬ者ぐあぢのるすきまれんべせりてアをきま
でもぬくこんぬ。ぬくちんとおとふ
つきそくんたちいづる　さん　ア　ぬ　きの毒ある　ぬでこぎうます
トいひつくぬ。ぬくちんとうとく
とものおまぬ。ぬの肉を立平和　広義ふ粒うう　変ぬ　ぬ。ぬうう
ろうく
現ろうせこの。ぬのけ〳〵ごく　髪鬱　とぬ。ぬひ
よこ
中ぬぎこんをぬ。倫父ふ野面こすのこまふ

きん
華山いわづ碧流と推量せ
ひちぐび
ども龍蟠鶴伯父の
うん　ぐ　きら　あどろ
ひろら島高と強して羅ら〳〵身の後梅
ふ　ま　ま　ま

さうぞ面白さまさるなせうぶ今宿父さんうら
ぐさんさんさん此金ぬ上を見ひ
ぐうぐうぐうぐう母の母のとう
んんんこのぐうんのうるもだ切れの一れう
をも舊とうんをとおいひるんんことぐの增ぐう
ら言うもかくやまんすぐ伯と出てあぐうん
図うんるも結る御のひの種
ぐうぐうぐう

ゆゝしの事の行さ有ク世まさ世ぶ
世ゝ人あゝ人の一れさゝ上ケて
ひくまゝ包ゝの紙を
ひらんべ二遍の内
出ケて事ひ事ゝ事べ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

トよりあくり八ア乞れ紙うら仕書を一冊入れ
くくくく

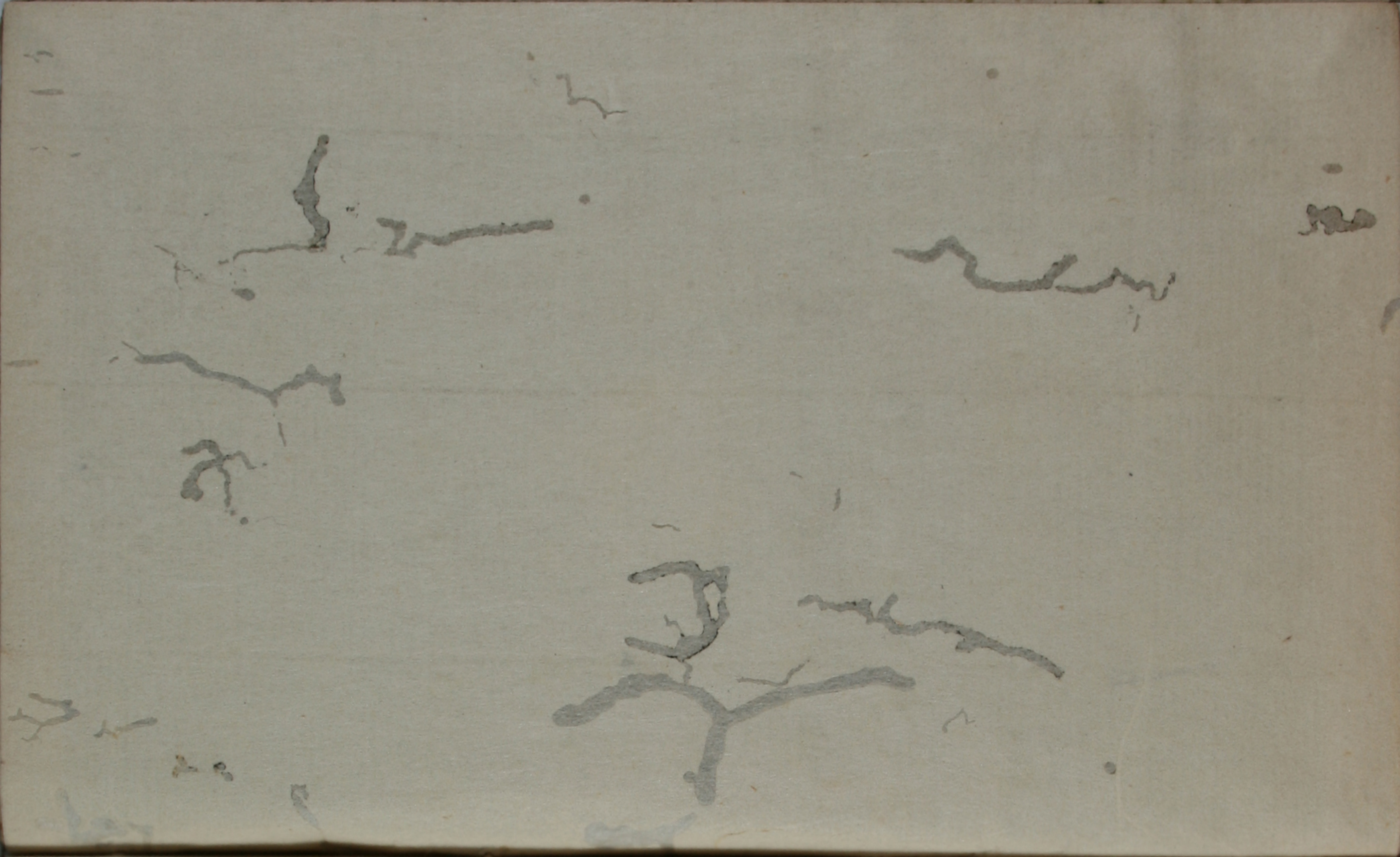
まゝ母と共に居る。こゝあり難き御父
の情。又その人の。義理付きの助
力。極まる事なれば。こゝろそろ
そろ。新と立ちかへり。羊一匹を。拾立給ま
ず。我生涯の。あやまり。悪く捨して
依敵の。あやまり。今更悔しく。面目なし
力。ふるゝと。知りて。あくまで。
悔ふ。。恐ロ難き。ものぐまそ。ものねんのまの

毒せんぎん塩魚しゝと豆腐の。傍父さま
出えんりきとうまもせ（トあげ）
きらずくらもちゝ飯やびきくの井もりろ
とさくりろ（トとうとび）ひをとうとびとを食をあるとを
ぞうんすんとうとびとうとび湯ふ（トとうとび）惜ゝ紡
絹とぞ。おんまり飯ろ（トようすぎ）
ぞうりまとたらひふ。島（トぐ）あきれとる
ぞうりまり。

他者（きく）人のいつぷ。一回（ゝゝ）の物（ゝの）がうゝ止（とぐ）の猪（へま）と
菊（きく）の井（ゆり）づ義とそ（ぐゝ）ゝゝ。ぷつとも病（ぐゝ）中妻（ぐゝ）ぐる
のゝ神（ぎゝき）ひ形（ぐゝ）。二猪（ゝゝ）ゝ姓義もまきれべ（ゝゝゝ）用後の

蔦屋

傳り下られ給ふ様なり。雛妓菊豆ゞ看る
を見るに。いろ〳〵善れまるひぐさと徳さんと
しがらの新向さまるべ吉ゝ色〳〵。先哲の小冊ふ
仙書べ。美と世ずして菊の井ゞ。吉界をのゞ色
目出度物語とする事ちまり。

花衛寿ゝ女中巻終

岡松